仏教葬送事物の発展比較考

和田謙寿

一

人間の持つ主義信情というものは、風土性の影響を受けている場合が意外に多い。キリスト教が麦作地帯に栄え、仏教が稲作の地域に、回教が乾燥の地域に栄えたのも何か大きな意義を隠し持っているものと思われる。

元来、人間の持つ主義主張は当人の素質をはじめとして、気象、地質、地形、植被などの諸条件に支配されている場合が多く、たとえば、仏教の内容を表現したと思われる形象として蓮華の像が、回教の事物を表現したものの中には日・月・星等の自然物を浮彫にした事などによってもわかる。キリスト教が欧州をはじめとして北米大陸、新開発の諸地域に発展していったのも、神を中心とした他力的な条件を生み易い背景よりうなずかれるところであり、回教が片手にコーラン、片手に剣を持って布教に邁進したのも、砂漠に含まれるところの特異気象、特異地形への地域に発展するために止むを得ぬ所存であったのであろう。仏教そのものも、ビルマ、タイ国等東南アジア諸国に伝播して停滞したものの、その地域に於ける仏教慣習をつぶさに観察した場合、その国々の風土性に適した立場のもとに展開されていったのである。同じ仏教と言えども現在においては、風土性的な観点を抜きにしては考察し得ぬ現状にある。とくに仏教文化、仏教習俗考察の上から見た場合に然りである。世界の死霊観もその地域によって大部考え方が異なるも、その遠因を考察するに、風土生活慣習を通じての場合が考えられる。元来、死霊に対する見方は葬送習俗等を通して現われる場合が多く、その立場には二つある。一つは、死霊に対する嫌悪の観念より生ずるところの祖霊絶縁の考え方であり、他は死者への愛慕の観念より生ずるところの蘇生を願うための呪法的行為である。前者の場合は歴史を遡るに従って、つまり古代の社会に意外に多

く、死の本質意義の不可解度の高さに比例して増加し、後者の考え方は、死の原因に対する理解度が世間的に知れわたるにつれて順次増加し、後世的な思想観となる。しかしこの考え方は両者共に判然としているものではなく、時の環境や事情によって共存性があり得たのである。肉体と霊魂とが同時に宿る現象が生存の現象であり死は肉体より霊魂が去り行く状態と考えられ、死者に対する愛慕の観念は再び霊魂の肉体へ戻る事を強く欲する結果となり、魂呼びの習俗が要求されたのである。しかし年輩者（老人）や長く病める者の死は周囲の人たちの誰しも認めるところであり、むしろ若くして死亡した者や不慮の災害、産死等の場合にとくに多く斯かる風習が行なわれたものと考えられる。（死者に対して愛慕し悲しみ慕う結果、子どもが親に、親が子どもたちに名前を呼び続ける事は親子間における感情の発露であって、必ずしも魂呼びの習俗に相通ずるところのものではない。）一度この地を去ったところの霊魂も、お盆や正月等に帰宅する事もあると考えられ、一定の期間が過ぎると祖霊化し、時に応じてこの世に来降して子孫たちを加護し、平地部においては田の神として現われ、また、山間地においては山の神として民衆の間に迎えられたのである。台風や地震等の如き不慮の災害の多い地方ではとくにその傾向が著しかった。日本の場合は北から南に伸びる弓状の列島であり、しかもその距離は至って長く、周囲をめぐる種々の海流、しかも、日本海流と南方文化との影響は意外に強いものがあった。更に中国大陸や朝鮮半島を通じて来訪した文化はわが国古来の民俗文化に同化融合し、独特な死霊観を生ぜしむるに至り、更に日本の東部に位置する太平洋の存在は、東南アジアや大陸より伝播渡来したところの文化をわが国に停滞させ、一層その役割に度を加えたのであった。「島国であるわが国の宿命より生ずるところの死霊に対する考え方と海洋との関連思想の発生」同じく、「山間地域の七割以上を占めると言う国柄から生ずる、霊魂と山嶽信仰との関連思想の成立」また、それらの立場より派生的に生じたと思われる「死霊と往生鳥化思想等との考え方」等が種々なる立場を生ぜしめた。しかしなんと言ってもわが国死霊観の基盤をなしているものは世界的に著名な温帯性多雨気候をバックとし、稲作生活を中心につくり出されたところの社会現象と家庭生活より生じた立場のものであった。いわば稲作農耕を通じて生じた霊魂不滅的な考え方であったように思われる。

日本の国は周囲[1]を海洋で囲まれたところの島国であり、春夏、秋、冬の区別、つまり四季のハッキリとした気候帯であり、また、季節風や時に台風の襲来を受けることもある。印度をはじめとした東南アジアの地域には雨季と乾季のある代りに、日本には梅雨ならびに冬季に日本海側を襲うところの

豪雪を伴なう季節風の存在がある。このような気候的な特色は日本の農業形態や土壌景観、家族構成の上に独特な立場を与えたのである。日本の国は米作りにより生まれ、米作りにより育ち、米作りによって栄えた国であった。もちろん、部落の構成や家族構成というものもすべて農耕として米作りを中心に、その影響を受けて発展して来たものである。村の長も米作りの農民であれば、家の主も米作りの父親が中心となっていたのである。米作りの業は麦作りの業に比べたならば比較にならぬ程の重労働の作業であったが、常に祖父母や両親を中心とした家族全体の労働力により成立っていたのである。耕耘や播種、水田への灌漑のための見張り役、田植や田の草取り、稲刈、脱穀、俵詰、現在でこそすべて機械化されているけれども、昔日においてはすべて人力によって頼らなければならなかったのであり、労働的に大変な加重であった。梅雨中の蓑や笠をつけての田植や田の草取りの作業、折角育てあげた稲も旱害や台風のために絶滅に頻した事もあった。稲作農業ほど部落や家族の協力など大衆の援助を必要とする作業は外にない。日本の農業はこのような立場を背景として発展したものであった。そこには祖父母や両親、子どもたちと職場を通して深い血の繋がりによって生じたものであり、しかしてそこには孝養の念も一入深く醸し出される基調となったのである。このようにして日本の農業の中には、多分に孝養的思想を宿していたのであったが、他方、印度より中国を経てわが国に伝来した仏教の中にも孝養を旨とした教理を持った経典も少なくなかった。これらの教典の持つ考え方は日本農民の間に宿る考え方と同調するところがあり、やがて日本古来よりの習俗と外来仏教行事との二者が互に融合調和する形となったのである。中国も古代より儒教等を通して考えられるように、孝養思想の強い国柄であった。現在でも老人の家庭における地位は至って強く一家の大きな指針となっている。彼等の同朋である華僑の進出している東南アジアの諸地域でも、若者たちの生活において独断は許されず、老人たちを囲み敬い、いずれかというと保主的な家庭生活が営まれている。仏教的な面よりだけとは言われぬかも知れぬが、中国大陸という広大な地域において、こつこつと働くかつての農民たちにとっては自然に抗し得ず、ただひたすらに大地と共に日々を過す事以外に道は無かったのであろう。死霊に対する恐怖と愛慕との観念を共に所持していた事は他の民族と同様な事であったであろうが、霊魂は不滅なるものであり、その霊魂を大切に守り保護することによって、子孫たちが必ず祖先の恩恵を受けるものであると考えられていたのである。霊魂が不滅である以上、子孫は常に家庭の人たちや周囲の人たちに気を配る必要があった。これがやがて自己の幸福につながるものと考えられたからである。子孫たる者は

父母の生前中はよく孝をつくし、父母亡き後は納棺して厚く埋葬をし、一定期間は喪に服し婚姻や宴会等の如きニギヤカな席には出席をせず、専ら悲哀の意を表すべきであったのである。中国を中心とした近隣の国々では親よりも早く死亡した者はこの上もない不幸者として罵られたものであり、また、最高の孝行者は親の生存中に立派な棺桶を作ってあげる事であったといわれている。かかる習俗はその辺の事情をよく物語っているものと考えられる。中国東北省や黄河沿岸の地方には、地理的な悪条件によりこれという良材がないので、棺は小さな木片を繋ぎ合わせてつくられている。当地の一般の民衆にとって棺を作成するという事は非常に貴重な事であり、並大抵なものではなかったといわれている。儒教や仏教の精神もさることながら、かかる当地の風土性が、かような習俗や慣習を産み出したものと考えられる。

中華民国における死霊観[2]も大陸のそれとよく類似している点はあるも、地理的条件からおして中国南部地方の場合によく似ている。かかる考え方は現在東南アジア諸国等の華僑の間でも広く行われている。かつての中華民国では古来より大陸の周礼的な儀礼、つまり、儒教的な面を心のよりどころとしていたのであるが、その後道教的な思想と接し、それに陰陽道的な考え方が加味せられて当地独自の宗教観・霊魂観が成立するに至った。ただし、中華民国の山岳部や一部島嶼部の部族等に普及されているところの習俗とは大部その趣を異にしている。それは外部よりの呼びかけ（布教）によってその宗教観に大きな変化を来たしたからである。それは、戦後物質文明を中心としたキリスト教の各派の宣教師たちが精神的・物質的に貧しい山地の人々を主たる対象として伝道を開始したことによる。物質に恵まれぬところの彼等はキリスト教の伝道内容よりも、むしろ、物品給与の政策的立場に心を寄せる者が多く、その結果一時的に信徒も増加したが、最近彼等の周囲に物質の豊かに出廻るにつれてその発展も衰退の一途を辿るに至り、現在では仏教に帰依する者が急増するに至ったといわれている。彼等の中には死霊を恐れるがあまり、現在でも死後の供養をしない人たちがいるといわれる。中華民国台東の遙か東南の海上に蘭嶼という孤島がある。ここにはフィリッピン系の少数民族が住んでいるが、死霊に対する恐怖の観念が至って強い。「沢山の土人たちが郷朗島（蘭嶼）へやって来るのだが、このパンの木のあるところには、どういう訳けか皆んな寄りつかない。なぜならばそこには墓地があるからである。土人たちは死というものを非常に嫌っていて、そこに行こうとしない。死を悪魔と考えて近寄ることを拒否するのである。死亡した場合、故人に対しては室内に半時間以上は置かぬことにしている。死亡すると死者をすぐに縄でしばりこれを外に運び出すのであるが、かつぐ人は

真白に石灰を自己の体に塗り、死人を背負って墓地の方まで持って行く。ところが墓地まで連れて行かずに、その辺に穴や岩のさけめ等を見付けると、あたり構わずその穴の中に投げ捨てて帰るのである。なにしろ死者に対してものすごい程の恐怖感を持ち、そこには人情的なものはなに一つ持ち合わせていないとまで言われている。政府もこの点を遺憾と思いその風俗の是正に努めているが、現在のところいまだに、矯正の域に達していない。パンの木を別名、泣木と呼んでいるのは、恐怖のためその木のそばに土人たちが近寄らぬため名付けられた名称である。現在でも病気にかかり臨終になると、すぐに外へ出し仮小屋を建ててその中に入れ、死亡すると速かに捨てるが如く埋葬してしまう。昔はその小屋を穢れあるものとして、わが国の古代に行われた如く焼捨ててしまったのである。」同島は周囲十数粁からなる未開の小島であり、風土性より見て水葬の行われた事も考えられる。古老の話しによると、「この郷朗島村では、かって死亡者が出ると蓆に包んで縄巻にし海へ投げ込んでいたが、日本の統治時代に悪習としてその風習を止めさせ埋葬させることにしたといわれる。現在でも子どもの死亡時には水葬の行われる場合があるも、一般的には近くの海辺や山に布で巻き、あるいは縄でしばりつけた死体を埋葬する。その上には印をつけないのでやがては無縁となってしまう。」と語ってくれた。南洋・ミクロネシア[3]をはじめとした島々も昔日はその多くが水葬をなされたようであるが、いずれも風土的な背景と死霊に対する恐怖の念、葬法の簡易さ等が、かかる風習を育てたらしい。しかしその後キリスト教　仏教的な影響、つまり周囲に高度の宗教を所持した人たちが来訪するにつれて水葬的な行為が徐々に中止されるようになり、不慮の災害で死亡した者や子どもで死亡した場合というような特別な条件のある時に限り行われるようになったのである。その場合多く死体を蓆で包み錘（おもり）をつけて海底に沈める等の方法がとられた。島嶼や海岸部の住民たちは死霊の赴く来世は海の彼方にあるものと考え、大きな川に望む住民たちは川を越えた理想の地に来世を求めた場合が多かった。

同様に砂漠[4]の中に包まれて住んでいた住民たちもアフリカのチャガ族のように、来世所在を魂が危険な砂漠を通り抜けて旅するものであると信じていた。山間部に住む人たちの中には大きな山を越えた彼の地に死霊が宿るものと信じていた。また、アフリカのローダガ族は死の川が現世との間に隔たりをつくっているものと考えていたり、同様、インドをはじめとした日本古来の三途の川の思想や死出の山路の考え方等も何か相通ずるところがあったのであろう。その地域に住む周囲の風土環境がそれにまつわる思想を発展せしめた事は確かなことである。

二

古来より死者の家に訪れる人たちは誰れしも汚れを受けるものと考えられていたが、とくに不慮の災害の死による場合は恐れられた。かかる霊魂は、川流れや山岳での遭難、出産によるところの死などであったが、その中でもとくに、出産によるところの死は意外に恐れられていた。死んでも死にきれないと言う死者（母親）の怨念の深さを怖れたからであろう。かかる怨念の救いとして各地方では「流れ灌頂」などの習俗として残されている。かつて中国においては、このような霊に対して種々なる防禦の策をほどこしたのであった。

「とくに大蒜[5]の強い香りは、死の力が人の肉体に憑くのを防ぐと言う俗信により、衣服の下に大蒜を忍ばせ、その家を出るや否やそれを街頭に投げ捨てる仕草をとった。」と言われている。また、「わが家に帰り門内に入るときには、入口へ爐を置き、浄香の粉末を焼やしてその上を跨がせ、身を浄めた。」とも言われている。カンボヂヤにおいてもこれと同様な考え方が残されていた。この国[6]では、家庭生活の主なる三つの出来事のうち、結婚式だけが祝福を与えられる唯一の行事であり、家に危険をもたらす事がなく、これに対して死と出産の二者は悪霊に対して警戒すべきものであると考えられていた。中でも出産で死亡した女性ほど危険なものはないとして、その死体を怖れていたのであった。当地にはその穢れた死体の腐敗する肉や血、骨、垢から、凶鳥や大蝙蝠などの悪事を働く幽霊が生まれ出ると言う俗信があったからである。この産死した女性があの世に到着せずにその間をさ迷っている時に吐く臨終の呼吸でさえも、その者が満足していないときには、秘かに家族のもとへ舞い戻って家族を苦しめ、一家を不幸にするものと信じられていたのである。アフリカ[7]のアバルイア族においても、落雷や自殺など、不慮の死に方をした場合の人々の墓穴を掘るのを嫌われた。若し、そうすることによって掘った人間が穢れるからである。このような死者のために墓掘りをする場合には、穴掘に山羊一頭を贈り、これを殺した血で不浄を洗い流すのであった。一般の死霊に対しても恐怖の念を表わす習俗の行われている地方が割に多く、歴史を遡るに比例している。

わが国でも死霊嫌悪の目的をもって、死者を縄で縛り納棺した事例がかつて存在したが、中共や中華民国などの諸国においてもその名残を留めている。北京の近在[8]でも絆脚糸とう大麻で死者の脚をゆるく縛る風習があった。

これは死体が起きあがって家族に害を与えたり、悪霊が死体に乗り移って危害を加えないためのものであると言われている。同様に、陳蒲[9]爛の地方の黒苗も、死者を藤蔓を以って樹間に縛って空葬にしたり、青海地方でも、死者を着衣のま

ま縄で縛って坐らせ、その前に供物も置かず、焼香もせず、側に喪主が坐して来客を応対する風習があったと述べている。中華民国台南の近郊においても、納棺の際に死体を縄で縛ったり、椅子に坐らせた死体を縄でギリギリと巻きつけて葬列に侍った例が半世紀の前まで存在した。死霊が再びあの世よりこの世に帰郷することは、恐怖の幽霊として意外に恐れられていたからである。

シベリアのハバロフスク地方に居住するウリチ族の葬礼の際にも、死者の家には縄を結び、また、死者の足にも石を結びつけた。これは死者を家より運び出す際に家に害を与えられぬようになされたことであった。ウリチ族は二十世紀のはじめ頃まで死者を地下に葬ったが、埋葬には長いヒモを死者の髪に結び、棺から更に小屋を通してこれを地上に刺した節のある木に縛ったのである。何れも死者に対する恐怖よりの習俗であった。韓国にも、かつて麻糸にて手足を縛る習俗があったがその意図は明らかでない。更にまた、息を引きとった時や葬送事出棺の折に行われる茶碗を割る習俗も霊の嫌悪思想に連ながる儀礼として各地で行われた。京都府の舞鶴地方では、棺が家を出ると門口でたばねた藁を燃やし、死者が生前に用いていた茶碗を投げつけて割った事が報告されている。嫁に行く場合にも同様なことをしたと言われているがこれも二度と帰るなと言う意味合が含まれているといわれる。

岡山県外今の地方でも、出棺に先立ち、棺をかつぐとカドを三回ほど廻り、死者の生前用いていた茶碗を地にぶっつけて割ったと言われ、福岡県大島においても、荒藁で庭箒と中居箒とをそろえて出棺の際に掃き、棺が門の戸口を出る時に同様茶を棺割ったと伝えられている。この風習は日本ばかりではなく、中国の南部や中華民国、更には東南アジアのカンボヂヤの地域にも行われた形跡がある。中華民国での場合は、息を引きとった時すぐに茶碗を割る場合が多く、中には茶碗に代って湯呑みを割り、その後ただちに泣くと言う習俗もあった。これらも死霊が二度とこの世に……家に……舞い戻って来ぬことを願ったものなのであろうが、当地台北近郊の人たちはこの風習について、死者の菌が茶碗についているので、それが子孫の人たちに伝染せぬために、かかる行為をするのだと解説していた。カンボヂヤでもこれに類似した行為がなされている。つまり、葬式の当日一切の行事(祈禱)が終ると、皆で棺を降し、列を組んで火葬場へ向うのであるが、死者が家を出る時には、未練を残して戻らぬように、アシヤルが杙上から水の入った水差を三つと石を一つ地上に投げつけたと報告されている。多少儀礼めいたところはあるも、日本などの場合と同義に考えられるところであろう。死者を家屋から外部に出す場合に、つまり、出棺の場合に、原則として玄関より出すことを嫌う地方が事のほか多い。一般の人た

ちの日常出入するところの玄関を、死者が出入することは、この上もなく不吉、不浄の事とされていたのである。それ故わが国では葬送に当り、玄関を嫌って縁側より出棺する家庭が割に多く存在したのであった。江戸時代の民衆の家屋は非常に粗末なもので、竹片を格子状に組み合わせた上に田の粘土を上塗りする程度の土壁造りであった。葬送の場合に玄関よりの出棺を嫌ったところの農民たちは、土壁を突き破ってその穴より棺を出し、そののち直ぐに塞いだのである。そうすることによって、一度出棺した死霊の二度とわが家に立入ることを阻止しようとしたのである。[14] アフリカのンデベレ族間で死が訪れたとき、その場に立ち会っていた兄弟たちは直ちに墓穴の作業に移ったと言われる。死者は獣の皮か毛布に包まれ、家屋群の代表者が死亡した時は家屋の壁に穴をあけて屍体を出し、更に家屋群の周囲を囲っている切目から外へ出し、家屋の出入口や囲いの通路を使う事は禁じられていたのである。かかる習俗に対して、死者がその家屋群を完全に立ち去るのではなく、そこに居続けると言う信仰を表わすものであろうと考えている人もいたが、日本の場合と同様、死霊の再来を防ぐ呪法であったとも考えられる。昔から多くの民族の間で、死は生の反対現象であり、それに関わる行動が行われていたことは確かなことであった。死者の訪れべき来世はこの世の延長の場として、順調に考えられながら、他面衣食住などを中心とした、生活文化の面においては逆視せられたのであった。日常茶番事のわれわれに直接的な内容については、割合、自分自身の考え方によって変えられるので、自由自在、自己の意のままに変化していったのであろうが、風土的な大自然の影響については、その変更に不可能であったからであろう。しかしその地域性の相違は、ある意味で風土をバックとした特殊的な文化を生み出したのである。

この世とあの世との境界線を考える場合には、三途の川、死出の山、奥津城、賽の川原などの如く、現実のわれわれ社会の境界線が地理学的立場のもとに考えられるように、川、山、海、堀、などが引用して用いられた。そこには何事の矛盾や抵抗もなかった。しかし現世と死後の社会との対比となるや反対的な世界として考えられたのである。[15] それだけに葬送時における各種の習俗は意識して反対の行為がなされたのであった。死者の枕元に屏風を逆さまに立てかけたり、神棚にある花瓶を忌にかからぬ人をわざわざ頼んで逆さにしたり、故人が生前に着用していた晴着を死体の上に逆さまに覆ったり、[16] 死者の着物は生前の場合と区別をして左前に着せたり、死者に捧げる食膳に限り汁と御飯を普通時の逆にしたりした。また、湯灌の場合にも通例、湯をうすめる場合湯に水を注ぐのに対して、水に湯を加えて温くするような行為も敢えて行われたのであった。出棺の際も棺をかつぐ棒の前後を

逆にし、更に棺の正面を進行方向の反対にしてかつぐ方法もとられた。死者の着用する衣類も魔を避けるために個人では縫わず、死後、何人かの人たちの手によって作成される場合が多かった。しかも糸の縫目は結び目をつけず、普通の縫い方と区別をするために、いわゆる縫いっぱなしにされた。香奠帳も通例、われわれがノート類を右側より使用するのに対して、葬送用のためと左より裏返しに使用せられたのであった。香奠袋の場合も同様昔日においては表上側より金銭を入れず、下側、つまり、尻の部分より入れたのである。

中華民国をはじめ東南アジアの華僑の地域で使用されている香奠袋も現在同様なものが使用せられている。野辺送りや火葬場への行列も行きと帰りの道をわざわざ区別して通行している事も、死に対する生との特異な対象として見ていることによるのであろう。

三

悪夢や悪霊の穢より逃れ去ろうとする心は何処にも存在するところであるが、とくに、未開の民族の間にはその観念が強かった。かかる観念は葬送習俗の中などにも深く関連し、浄めの仕来たりとして現在にまで残されている。その浄めの方法も時と場合、ところによって多少の相違はあった。神仏の如き絶対者を祈ることによって浄めを祓おうとしたり、太陽や火力、灯などに頼ったり、また、物を燃やしたり、特異な調による音楽を奏したり、更にまた酒を用いる事などにより、或いは水・塩・米などの特殊な力によって効力を得ようとするなど、種々なる方法がとられたのである。わが国の場合には古より「ミソギ」を以って浄めの行為となされていたが、葬送儀礼の場合には殆んど用いられなかった。インドやネパール[17]、東南アジアの国々においては古来より現今に至るまで「ミソギ」つまり、葬送の参列後直ちに河水に飛び込み身体を浄める仕来たりが残されているが、日本の場合もつい最近まで西南部海岸の地域に、海水にて身を浄めたことが語り継がれている。元来、わが国は周囲を海洋によって包まれた島国であり、浄めと塩についての因縁の深そうなことは十分考えられるところであるが、しかしこの傾向は古来中国にも存在していたことに深く注意を引く。（塩はなまものの腐敗をふせぐ防腐剤として古くより世界各国で貴重品視されており、浄め塩の風習も或いは腐敗物の浄化や重要品を神に捧げる意味から発展したものではなかろうか。）石垣島では葬送[18]の際、念仏衆が海水を以って死者の顔をふいたと言われているが、これに関連した話はその近隣諸島にも分布している。浄めの作用としての海水の利用がやがて塩の使用へと変化したかどうかは定かでないが、現今の日本では塩が「ナミノハナ」として浄めのランクに利用せられていることは確

かであろう。塩を用うると言っても種々なる仕来たりがあり、そこにはただ、塩をふりかけるだけのところから、嘗めるところ、更にはそれにちなんで何らかの仕草をするところと色々ある。かつて、高知市の近郊において会葬[19]した人たちは、帰路はとくに道を変え、家に着いた場合自宅の門前で塩を肩越しに後方に投げ、身を浄め穢を去るところの作法を行って後に家に入ったと言われる。長野県の諏訪湖地方では、葬送の列に加わった者が帰宅する場合、門前にて草履を脱ぎ塩で手を洗い浄めるものとされていた。この場合には塩を手移しにする故に、普通の生活において塩を手移しにすることは大いに嫌われていた。しかも足をタライの中に入れて、足と足とで擦りながら洗い、ぬれた両足をふきとる場合には、死者の生前着用した衣類にて拭うものとされた。その後手足を洗い浄め、更に冷酒を一杯呑んでから家に帰るものとされていた。大分県の国東半島においては塩と共に味噌を以って浄める場合もあった。このように考え方が変化しているのも地域の事情によるところが大きい。京都府の舞鶴地方では、葬式から帰えって来た時には水を入れたタライが門口に出してあるので、ワラジをぬいて足を洗い、下駄にはきから、そののち塩を撒いてその上をふみながら入室した。会葬した場合には門口でヒシャクの一杯位の水を流し、その上に塩を撒き、それを踏みながら家に入る。そのような行為をしないと一緒についてきた死霊が離れないので、間もなくその家に不幸な出来事が起ると言われている。塩を死霊の魔除けとして用いられている例は中国においても存在した。デ・ホロート[20]は中国南部地域における例として、「中国宗教制度」の著中に掲げ、次の如く述べている。「死者が出ると先ず祭壇が設けられる。祭壇には浄めに必要なところの品々をそこに供えられる。小さく丸い壺の水と鉢に盛られた塩と米とを混ぜたものである。祭壇は死の力より免れるところのものと見られ、用意が終ると僧は、僧衣・僧帽を着用して祭壇に位置し、鐸鈷を振りながら天地四方の神々を呼ばわり、その威力によって浄めんがために神々を招く詔を唱える。その後水から悪い力を追い抜うために水に向って呪文を唱えるが、これを「勅水」と言い、その旨を水に命令すると言う内容より出来た言葉である。次に黄色の小さな紙から出来ている十二枚の護符を焼き、その灰を水中に投げて水を祓い浄めるのである。次に塩と米も同様に呪文によって浄められる。このようにして出来上った威ある霊品を用いて僧侶は、呪文、呪句を低声でおもむろに誦し、死者を導くのであるが、この祓いの儀礼はその家のすべての部屋に対して行われた。そののち、塩と米とを混ぜたものは水と同様に処分されるのである。この儀式を「撒塩米」と呼ばれているが、この混ぜ合わされたところの米と塩は、邪性を及びた目に見えぬ精霊に対して強

力な浄めの力を有し、彼等をして「無力化せしめると考えられていたのであった。」と、浄めと塩との関連については、中国においても認められるところである。

「穢を掃く」と言うこともまた、自然的な成り行きとして考えられた。青森県の野辺地付近の慣行として、棺のかごをかつぐ人は出かけに樽とか笊などを踏み破って行く風習があった。また、草履のヒモを切り捨ててから出るものとされていた。かごが出てしまうと土間に灰を撒いて、モカリの室、つまり、今までかごを置いた部屋を掃き出す。そして素早く跡札をはる。それもモガリの部屋の四方にはる。処によっては入口だけに跡堅札としてはるところもある。（このように部屋を掃くのは嫁の出たあとにもする風習があると言われる。）いずれの場合も掃く者は二人であり、一人では行わないことになっている。全国的に行われている葬送習俗の一つとして、出棺の折、棺を送り出したあとで、手伝いの女衆が急いで箒にて祭壇を祭っていた部屋を掃く風習がある。昔日においてはその際、一握の塩を撒き散らして塩と共に掃くのが通例と考えられた。つまりこれは、部屋に残れる死霊を除き、魔を祓い浄めるための儀礼であったのであろう。しかるに現在は、むかしからの習俗が忘れられ、塩を撒くことなく、何時の間にか清掃の為のみのものとなってしまったのである。

更に、魔を祓い浄めるものとして酒を用うる場合もある。湯灌の折や穴掘りなどの場合、その他葬送儀礼の中にも、しばしば酒を用いられる事がある。いずれも浄化を目的として使用している場合が多い。酒は「魔を避ける」に通ずると言われるが、ゴロ合わせからも昔日より魔除けのために利用されたのである。近年になると酒がビールに転化している場合もあるが、時に応じて旧来のまま、「浄め」の名称で用いているところもある。酒類が魔を祓うと言う例は東洋ばかりでなく、その他の地方にもその例がある。アフリカの中部[21]に住むンデベル族においても『一ヶ月から三ヶ月立つと埋葬に立ち会った人たちを呼んで「鍬を洗う儀式」が行われるが、その際にビールを醸造して埋葬に使った道具をビールビ洗い、家屋群の子供たちには呪薬として飲ませていたと言われる。先祖代々の古よりその地域に適した方法によって種々なる儀礼のなされていることは当然な事であるが、それがある地方では酒になり、ある地域ではワインやビールとなる。同様に、葬送の儀礼に関連のある動物などでも、猪や鹿など、その地域に関係のあるものが登場する。香の場合においても然りである。印度や中国においてはその地域に産する種々の香を焚く事によって悪霊や魔を避けるに役立たせたし、日本においても杉や香水を焚く事によってその目的を達成した。

長野県の諏訪[22]地方では埋葬された墓地の上で無情の煙を挙げるが、かようにして火を焚くのは魔除けのためであると言い伝えられている。かかる考え方は日本ばかりではなく北欧地域にもあるといわれ、例えば、白海からエニセイ[23]川に及ぶニエーニエツ族の間では、葬礼のあと参加者たちは鹿の脂肪をくすぶらせて身を浄めたのであるが、この脂肪をくすぶらせる場所は墓場での場合もあれば、家に戻ってからの場合もあったと言われる。その鹿は生前、ソリを引いたり、葬礼に出たことのある鹿を犠牲にしたのである。他方、この殺された鹿は、これに死者が乗り鹿の魂が主人に従うためのものであると考えられていた。女性が死亡した場合には、とくに、その墓の上に生前その女のつけていた鈴が懸けられ、風が吹くと墓場のある近くから鈴の音が聞こえたと言われる。この鈴の音は悪霊から墓場を守るためのものであると考えられている。葬送時や穴掘のときに火を燃やす風景が日本の山村をはじめとして、華僑の点在している東南アジアの各地で見られたが、これらの習俗は灯によって暗国のあの世を照すためのものばかりではなく、その中には煙によって悪霊を追い祓う立場も含まれているものと考えられた。また、葬送時にヤカマシく不調和な鈴や鐘が打ちならされるのも、今考えるとそのような意味が含まれているものと思われる。エニセイ川近在における鈴の音による悪霊祓いの習俗も古来よりの長い伝統であり、とくに日本での葬送時に辻々で鳴らされるジャンボンの鐘音も、また、少女たちの腰（帯）やポックリ（下駄）の内部につけられた鈴飾りの音も同一の事例として考えられる。

四

日本では臨終と言い病人が死に近づくと、そのそばに近親者が集まり本人の最期を篤く見守ると言う風習があった。ときには菩提寺で理趣文による祈禱をなし、その意義ある水をもらい受けて軽く病人の口を拭い浄めることに意を注いだ。田舎では、生前中に病人より指示せられていた山会の谷水をわざわざ汲んできて当人の唇を拭ってやったこともある。いわゆる末期の水と言う習俗である。末期の水については遠く印度においては長阿含経[24]に、わが国においては真俗仏事編[25]などの古書に示されているところであるが、この風習は東南アジア諸国においては、現在あまり行われていない。あらゆる手段方法を尽くしても病状が回復しない場合には日本の習俗とは異なり、中華民国や東南アジアの田舎部に住む人たちは祖先を祀るための一番大切な部屋、つまり正庁へ寝室より移動するのである。かかる行為をなすことによって病人の死期を早めるおそれがあると言うので、最近では大部この風習も少なくなってきている。年老いた信仰の強い人たちは死期が

近ずくと、自から死亡した時に着用する着物を用意するのが通例である。死に対する恐怖の観念は至って強く、死者を危篤状態のときに寝室（病室）より正庁に移してしまうのもそのためであろう。正庁には長椅子を二脚置いて板を並らべ、その上に敷物を敷き布団を布いて病人を臥せしめて息の絶ゆるのを待ったのである。子供の場合には、ただ、土間の上に敷物を敷いてその上に置く程度である。近親者の死を覚悟しているとは言うものの、やがて不吉の死期が訪ずれて来るわけであるが、中国や朝鮮半島などの地方ではそれを確かめるために古来より動き易い新綿や糸を口や鼻につけて息を窺い、それによって呼吸の絶えた事を確かめたのである。[26] 現在でもマレイシアやボルネオなどの華僑の間にかかる風習が現実に残されている。死期の訪ずれようとしている直前に遺言をさせる例も中国などの諸地方に存在したが、インドやパキスタンなどの回教地方にも存在している。とくに、バングラデッシュの地域では二人以上の証人の前で遺言をするなど、[27] 葬送儀礼の中で重要な事項になっている。果して病人の側より遺言を必要としたものなのか、それとも周囲の親族がそれを必要としたものか、これは時と場合で色々と考えられるところのものであり、はっきりと区別はせられぬが、中国南部や中蓋民国などの例では、どうも前者の立場が多いように考えられる。病人が自分の命ももはやこれまでと悟り、つまり臨終に立入ったと考えられた場合、周囲に集まった人たちに対して遺産金を分配することになる。この場合、金持ちの家では「分手尾物」といって、当人の大切にしていた指輪や腕輪、衣服などを遺産金の変りに分け与えることもあった。そのおかねや品物を与えられた場合には、子孫たちはそのおかねは使わずに大切にたくわえ、品物を他人に譲るようなことはしなかったと言われている。その「分手尾物」が行われた証明（あかし）として、葬送の折に布で造った腕輪を手首に付けている人たちを台北近郊の片田舎でしばしば見受けることが出来た。もちろん、このような儀礼が葬送の際に必ず行われるとは限らず、資産の乏しい人たちの間に行われぬのは当然である。日本においては生前に行われるのは希なことで、主に衣類を中心に死後に親戚縁者の人たちに配分され、三十五日から四十九日目当りにかけて終了するように行われるのが通例であった。中華民国においても日本と同様、死後一定期間のうちに行われることもあり得るが、ただ単に死者の衣服を財産分与のつもりで分配すると言うよりも、死者の霊魂の宿れるものを肉親に贈ると言う意が先行していたもののように考えられる。

死に臨んで先ず周囲の肉親の人たちが故人の苦しみの顔を察して瞼や唇などを摩（さす）り、安らかな様相を保つべく努力し、同時に手足を撫でて死後の硬直するを防ぐ仕草をとる。かか

る行為は死者に対する親愛慕情の念として日本のみならず世界各地で行われる習俗であった。その際周囲の人たちは念仏（或いは神の名）を唱えたり、死者の名前を何度となく呼び叫んだり、号泣にふけったり、死者を或る一定の方向にむけて、ひれ伏したり、その地域地域の風土性や考え方によって独自の習俗が構成されて行ったのである。

名前を呼ぶにしても、臨終の時に呼ぶところもあれば、死んだ後に行うところもあり、また、名前を呼ぶ方角やその方法仕草もまちまちであった。「儀礼」や「礼記」などの中にも死哭の制の行われていたことを示し、その風習の古さを物語っているが、これはなにも中国だけのものではなく、若しも各国に古代からの資料が温存せられていたならば中国と同様に、他の国にもかかる風習が存在していたものと考えられる。名前を呼びながら周囲のことなど一向にかまわず大声を張り上げて泣き崩れる人たち、棺にかじりついて、ただただ非痛の叫び声をあげて泣く人たち、いずれかと言うに大声をあげて泣く者は女性の間に多く見受けられた。これは心からの深い故人に対する感情・痛切な叫びであったのであろうが、現在でも香港や台湾・韓国などで葬式の際、時折見受けられる。仏教の伝来以前に葬送儀礼の存在したことは確かなことであるが、その当時は経典もあるわけではなく、ひたすら、イタコやユタの如き呪術者によって行われていたのであろう。このことは古典や埴輪人形などを通じても知ることが出来る。現在でも与那国島やその近在の島においてはユタによって葬儀が営まれており、本土より僧侶が上陸して布教に励んでも一向に受け入れられない現状にある。元来、葬送と言うものは、より大ぜいの人々が参加し、故人の徳をしのびつつ、賞めたたえ、より多くの人たちによって号泣されることが、最高の葬式と考えられていたのである。

引用・参考文献

(1) 和辻哲郎「風土（人間学的考察）」昭和五十二年（再版）岩波書店発行　九十一頁
(2) 鈴木清一郎「台湾の冠婚葬祭」台湾日日新報社発行　二〇六頁
(3) 松岡静雄「ミクロネシア民族誌」昭和十八年　岩波書店発行　三〇八頁
(4) 大森元吉「アフリカの宗教哲学」昭和四十五年　法政大学出局発行　版　一九〇頁
(5) デ・ホロート「中国宗教制度Ⅰ」昭和二十一年　大雅堂発行　三十一頁
(6) 「カンボヂヤ民族誌」昭和十九年　生活社発行　二五八頁
(7) 大森元吉「アフリカの宗教哲学」昭和四十五年　前同　一八二頁
(8) 内田道夫編「北京風俗図譜」昭和三十八年　平凡社発行　八十二頁
(9) 井出季和太「支那の奇習と異聞」昭和十年　平野書店発行

二〇八頁三二八頁

(10) 大木伸一訳「シベリアの民俗学」一九七四年　岩崎美術社発行　五十二頁

(11) 今村鞆「朝鮮風俗集」大正三年　斯道館発行　六十二頁

(12) 萩原正徳編「日本の葬式慣習」昭和八年　一誠社発行　一一四・一三二・一六三頁

冠婚葬祭新聞社編「日本の葬儀」昭和五十年　式典新聞編集部発行　一二八頁

(13) 「カンボヂヤ民俗誌」昭和十九年　生活社発行　二六〇頁

(14) 大森元吉「アフリカの宗教哲学」昭和四十五年　前同　一七八頁

(15) 和田謙寿「仏教の地域発展」一九七八年　仏教民俗研究会　三四六頁

(16) 萩原正徳編「日本の葬式慣習」前同　一六三頁

(17) 沢英三「インド・パキスタンの習俗」昭和二十七年　毎日新聞社発行　二三七頁

(18) 井之口章次「日本の葬式」一九六五年　早川書房発行　八十六頁

(19) 萩原正徳編「日本の葬式慣習」前同　一五五・七六頁

(20) デ・ホロート「中国宗教制度Ⅰ」昭和二十一年　大雅堂発行　一〇〇―一〇一頁

(21) 大森元吉「アフリカの宗教哲学」前同　一七八―一七九頁

(22) 萩原正徳編「日本の葬式慣習」前同　七十六頁

(23) 大木伸一訳「シベリアの民俗学」一九七四年　山崎美術社発行　一四七頁

(24) 長阿含遊行経（大正一―十九の下）

(25) 真俗仏事編巻四、(七)亡者供水の項、享保年代、沙門子登輯

(26) 韓東亀編「韓国の冠婚葬祭」昭和四十八年　国書刊行会発行　二八三頁

デ・ホロート「中国宗教制度Ⅰ」前同　五頁

(27) 沢英三「インド・パキスタンの習俗」昭和二十七年　毎日新聞社発行　二三九頁